

人生100年時代に向けた高齢者の社会参加

◆「仕事付き高齢者住宅」のモデル事業始まる

「人生100年時代」を迎え高齢者の新しい社会参加への取り組みが注目される。経済産業省は、「2017年度健康寿命延伸産業創出推進事業」の一環として、高齢者施設・高齢者向け住宅などの利用者が、仕事をしながら生活する「仕事付き高齢者向け住宅」（「仕高住」とも呼ばれる）の実証実験を始める。

17年10月、第1号モデル事業として、社会福祉法人伸こう福祉会と東レ建設の共同プロジェクトが採択された。伸こう福祉会が運営する介護付き有料老人ホーム「クロスハート湘南台二番館」の入居者に、東レ建設の高床式砂栽培農業施設「トレファーム」を用いて野菜の生産に関わってもらおう。「トレファーム」は、同施設に近いビニールハウス（約300m²）内に設置され、腰をかがめずに農作業ができる上、車椅子の高齢者でも作業が可能だ。17年12月から葉物野菜の栽培を始め、収穫された野菜は、近隣にある「イオン藤沢店」で販売される。

サービス付き高齢者向け住宅（以下、「サ高住」）などの入居者は、自分のお金がいつまで続くかという不安を抱えている人も多い。伸こう福祉会は参加者への報酬として月5万円を目標に掲げ、18年度から仕事の種類をさらに増やす計画だ。

◆子供を通じて地域とのふれ合いの機会を提供する「サ高住」

一方、サービスを受けるだけでなく、多世代との交流や役割を担うことによって、高齢者の社会参加を促す取り組みもある。たとえばシルバーウッドが展開する「サ高住」7ヵ所には、1階に駄菓子屋がある。毎日10時から17時まで営業しており、店番は数人の入居者が自主的に交代でお店を手伝っている。いずれの駄菓子屋も、夕方になると多くの子供が連れ立って訪れ、高齢者との交流の場になっている。子供たちは、建物内も出入り自由なので、駄菓子を買うだけでなく、宿題をしたり遊んだりして家に帰る。高齢者施設の入居者は、外部とふれ合う機会が少ないが、子供を通して、入居者も地域住民であることを実感できるという。

適度な仕事は、高齢者の生きがいや充実感につながる。要介護者でも可能な高齢者の新しい社会参加への取り組みに、今後も注目していきたい。【秋元真理子】